

## 学習習慣・態度、ソーシャルサポートと学業成績との関連

### Relationship between Learning Habits, Learning Behavior, Social Support, and Academic Performance

山北 和幸・土田 満\*

井戸田整形外科 名駅スポーツクリニック

\*愛知みずほ大学大学院

Kazuyuki YAMAKITA and Mitsuru TSUCHIDA\*

*Idota Orthopedics Meieki sports clinic*

*\*Graduate Center of Human Sciences, Aichi Mizuho College*

#### Abstract

In order to enhance the quality of education for students with poor performance, we examined the relationship between learning habits, learning behavior, surrounding social support, and academic performance. When problems in learning habits and learning behavior were displayed, behaviors that learning or that entertainment responses were elicited. Regarding social support, analysis was conducted by dividing into two groups, “group with support” and “group without support”. In the upper GPA was the percentage of students who solved what they did not understand on their own, and those who left it as it is, was also high, and it was observed that students could study on their own without having to ask the teacher. On the other hand, regarding the lower GPA group, with respect to learning behavior, it was observed that study was postponed, and students were unable to prioritize. The upper GPA group understood teachers to be a form of social support, them as a means to provide them with that which they did not understand or to provide various kinds of information. Also, it was suggested that by receiving support from teachers, students are acting to enhance their self-efficacy.

キーワード: 学習習慣; 学習態度; ソーシャルサポート; 学業成績.

Keyword: Learning habits; Learning behavior; Social support; Academic performances.

#### I はじめに

近年、学生の学力低下が問題となっている。その背景として、1980年にそれまでの詰め込み教育が見直され、「知識の理解」に偏らず、学習の過程で習得する「関心・意欲・態度」や「思考の判断・表現」による学力を提起した教育が徐々に導入された。その結果、週休5日制、授業時間数の軽減などに伴う学力の低下が問

題視された。また筆記試験よりも才能や個性に特化した入試 (Admissions Office: 以下 A0 入試) の導入により、高校を卒業した時点での学力が保障できないまま入学してくる現状もある。さらに少子化が進む中、大学・短期大学・専門学校の数が増えたために努力しなくても入学しやすい全入時代になった背景も原因で

あるという報告もみられる。そのため一定の学力を保つために、各学校は時代に応じた工夫が必要とされ、様々な取り組みを行っている。

学業に関する報告は多く様々な観点から検討されている。山北ら<sup>1)</sup>は生活習慣が身体疲労、学業成績に与える影響について調査し、アルバイト、SNS・メールの時間、インターネットに費やす時間の増加は、必然的に睡眠時間を減少させることになり、学業に影響していることを報告している。しかし睡眠が十分に取れている成績上位群でも、少なからず講義中に居眠りをしていた結果も得られ、生活習慣・身体症状以外の学業に影響を及ぼす要因を検討する必要性を報告している。

学業成績は睡眠の影響以外に長根ら<sup>2)</sup>は学習意欲も重要だとしている。そのため教員は成績に関わらず居眠りの原因を把握することや覚醒水準を低下させないような授業を行う工夫が必要となる。

それ以外に学習習慣があげられる。ベネッセ教育総合研究所が大学に行った調査<sup>3)</sup>によれば、学習習慣が身につけていない入学生が、「半分以上いる」と答えた大学が31.8%、「3割くらいいる」と答えた大学が36.4%と約60%の大学が学生の学習習慣について問題としている。また大学生に大学受験について振り返ってもらった調査<sup>4)</sup>によれば、推薦・AO入試で入学した学生の約50%が高校在学中に0から1時間未満しか学習時間を確保しておらず、さらに20%の学生が受験対策を行っていないことを報告している。入学後の学習時間については「第52回学生生活実態調査の概要報告<sup>5)</sup>」、「私立大学学生生活白書2015<sup>6)</sup>」によれば、過去に比べアルバイトを行っている学生とアルバイトの時間は増加し、一方で学習時間は減少していることが報告されている。そのため、いかに学習時間を確保するのか意識させることが課題となってくる。

その他、学業成績に影響を与えるものとして周囲のサポートも要因の一つに挙げられている。ベネッセ教育総合研究所が大学に行った調査<sup>3)</sup>によれば、大学で学ぶ目的がはっきりしていない学生が、「半分以上いる」と答えた大学が28%、「3割くらいいる」と答えた大学が37.4%と合わせて約60%の大学が学ぶ目的が明確でないことを報告している。そのため入学してからのサポートが必要となる。外山ら<sup>7)</sup>は学習意欲と周囲との関わりについて、学業成績に影響を及ぼす社会的比較の因果プロセスを検討し、自分より優れた他者と比較した場合、学業成績の高さに結びつくプロセスと低下につながる両方のプロセスがあることを明らかにしている。

以上のことを踏まえ、本研究では成績が不良である学生における教育の質の向上を目的とし、学習習慣・態度、周囲のソーシャルサポートと学業成績との関連

について検討した。

## II 研究方法

### 1. 研究対象者

愛知県のA専門学校の理学療法学科、及び看護学科に在籍している学生で調査に協力を得られた131名とした。

### 2. 調査方法

調査期間は2017年7月から8月にかけて行った。方法は、無記名自己記入式アンケート調査を実施した。

### 3. 調査内容

アンケート内容は、以下の6項目とした。

#### 1) 対象者属性

所属学科、学年、性別、年齢の4項目について選択式、及び記述式で回答を求めた。

#### 2) 成績

本調査では、Grade Point Average (以下、GPA) を用いた。GPAは前年度終了時のポイントを記述式で回答をもとめた。またGPAを正確に回答してもらうため、成績を管理している受付にて各自、GPAのポイントを確認し、回答してもらった。

調査対象のGPA算出方法は、科目毎の評点(80点以上; A、70点以上; B、60点以上; C、60点以下; F)を4段階で評価し、A評価11点、B評価7点、C評価4点、F評価0点の点数(Grade Point)に置き換え、それに各単位数をかけて足した合計点を総単位数(Grade Point Total)で割ってスコア化している。なお調査校のGPA最高値は11ポイントである。また、その他の項目との比較検討をするため、GPAの分布により「下位群」「中位群」「上位群」の3分位に群分けした。

#### 3) 学習の習慣

1週間の勉強時間(普段・試験前)、予習の有無、復習の有無、授業で理解できなかった時の対応、自己学習時の音楽を聴く習慣の6項目について4もしくは5件法の選択式とした。

#### 4) 授業中や試験前、課題が提出されている時の行動

中西らの大学生を対象とした日本語版学業的満足遅延尺度<sup>8)</sup>を一部修正して用いた。

この尺度は「授業時の学習」「試験前の学習」「普段の自主学习」の3種類で構成された9の場面を参照し、各項目において学習を優先する行動(A)と娯楽や休息を優先する行動(B)を提示した。各質問項目への回答

は、「絶対にBを選ぶ=1点」「恐らくBを選ぶ=2点」「どちらかと言えばBを選ぶ=3点」「どちらかと言えばAを選ぶ=4点」「恐らくAを選ぶ=5点」「絶対にAを選ぶ=6点」の6件法の選択式とし、点数が高い程、学習目標の達成のために即時的な欲求や報酬を後に回す能力が高いことを示している。

5) 友人・家族や教員のサポート

片受らの大学生用ソーシャルサポート尺度<sup>9)</sup>を用いた。尺度は23項目からなり、学生が周囲から貰えるサポートを、どれだけ期待しているのかを測定するものである。友人・家族のサポートは23項目、教員のサポートは一部修正して21項目を使用した。各質問項目への回答は、「まったくあてはまらない=1点」「どちらかと言えばあてはまる=2点」「割とあてはまる=3点」「非常にあてはまる=4点」の4件法の選択式とした。また、その他の項目と比較検討をするため、周囲のサポートのとらえ方によって、サポートされていると感じている群を「サポートあり群」、感じていない群を「サポートなし群」の2分位に群分けをした。

4. 分析方法

対象者の属性、GPAについては単純集計を行った。GPA3群と学習習慣の関連については $\chi^2$ 検定を行った。またGPA3群と授業中や試験前、課題が提出されている時の行動との関連については、正規性の検討により一元配置分散分析とその後の検定、あるいはKruskal-WallisのH検定とBonferroni補正のMann-WhitneyのU検定により多重比較を行った。

友人や家族、教員のサポートについては、主因子法・プロマックス回転で因子分析を行った。また因子分析で抽出した各下位尺度因子の得点をGPA3群と正規性の検討により一元配置分散分析とKruskal-WallisのH検定を行った。さらに抽出された因子を「サポートあり群となし群」の2群に分けたものとGPAとの関連について $\chi^2$ 検定をおこなった。

分析にはIBM SPSS statistics Ver.24を用いた。それぞれの検定においては危険率5%以下を有意水準とした。

5. 倫理的配慮

学校長ならびに各学科長に許可を得て行った。調査対象者に、得られたアンケート結果は、個人を特定できないこと、統計処理及び解析を行う旨を口頭とアンケート用紙の文章にて説明し、同意を得て調査を実施した。

III 結果

調査対象者131名のうち回収できた調査票は122名であった。その内、調査票の記入漏れがある者6名、同意を得られなかった者1名を除いた115名を分析対象者とした。

1. 対象者属性

Table 1に対象者の属性を示した。理学療法学科60名、看護学科55名で、年齢は22.0±4.51歳であった。

Table1. 対象者属性

(n=115)						
項目	平均値±SD	最小値	最大値			
年齢(歳)	22.0±4.51	19	38			
所属・学科における人数の内訳						
項目	理学療法学科		看護学科		計(名)	
性別	男性	女性	男性	女性		
学年	2年生	18	7	5	26	56
	3年生	12	8	3	21	44
	4年生	8	7	0	0	15
計(名)	38	22	8	47	115	

2. GPA

Table 2にGPAの内訳を示した。全体のGPAは8.62±1.41であった。対象者のGPAを成績の「下位群」「中位群」「上位群」の3区分に分けると「下位群(5.50~7.80の区間)」38名「中位群(7.88~9.27の区間)」38名「上位群(9.31~11.0の区間)」39名であった。

Table2. GPAの内訳

(n=115)				
項目	平均値±SD	最小値	最大値	
全体のGPA	8.62±1.41	5.50	11.00	
(n=115)				
項目	GPA			
	下位群 (n=38)	中位群 (n=38)	上位群 (n=39)	
GPAの平均	6.96±0.16	8.69±0.42	10.17±0.51	
GPAの区間	5.50~7.80	7.88~9.27	9.31~11.0	

3. GPAと種々の要因との関連

1) 学習の習慣

Table 3にGPAと学習の習慣との関連を示した。1週間あたりの学習時間については、普段の日においてGPAと有意な関連が認められた。1週間あたりの学習時間が、10時間以上の割合はGPA上位群が57.1%に対し、GPA下位群では9.5%と、GPA上位群がGPA下位群と比較して、学習をおこなう割合が高かった。また学習時間が4時間未満の割合もGPA上位群は31.3%に対し、GPA下位群は27.1%とGPA上位群の割合が高か

った。予習・復習の有無については、GPA と有意な関連が認められなかった。

授業で理解できなかった時の対応については、GPA と有意な関連が認められた。授業で理解できなかった時の対応において、「講師に聞く」割合が GPA 上位群は 73.7%に対し、GPA 下位群では 10.5%であり、GPA 上位群が GPA 下位群と比較して、講師に聞く割合が高かった。一方で、「1人で解決する」もしくは「そのままにしておく」と回答している割合も GPA 上位群が 32.0%に対し、GPA 下位群は 28.0%と GPA 上位群の割合が高く、GPA 上位群は講師に聞かなくても自己で学習できることが認められた。また「同級生・上級生に聞く」と答えた割合は GPA 上位群が 23.9%に対し、GPA 下位群は 40.8%の割合を占めており、GPA 上位群とは反対に GPA 下位群は、講師に聞かずに身近で質問しやすい同級生や上級生に聞くことが認められた。

自己学習時の音楽聴講の有無については、GPA と有意な関連が認められた。自己学習時の音楽を「だいたい聞いている」割合が GPA 上位群は 20.7%に対し、GPA 下位群では 55.2%であった。また「聴いていない」割合は GPA 上位群が 50.0%に対し、GPA 下位群では 16.7%と GPA 上位群が GPA 下位群と比較して、音楽を聴かずに自己学習時を行っている割合が高かった。

2)授業中や試験前、課題が提出されている時の行動との関連

Table 4 に GPA と授業中や試験前、課題が提出されている時の行動との関連を示した。授業中や試験前に課題が提出されている時の行動と GPA3 群間の差を比較した結果、「授業中について」の場面の項目において GPA 上位群と GPA 下位群、「授業内容が理解できないとき」の場面の項目において GPA 上位群と GPA 下位群、GPA 上位群と GPA 中位群、すべての項目の総得点において GPA 上位群と GPA 下位群に有意差が認められた。「授業中について」の場面では、GPA 上位群が GPA 下位群と比較し、「教員の言っていることを聴かずに好きなことをして後で友達にノートを書かせてもらう」といった娯楽や休息を優先する行動よりも「教員の言っていることを注意して聴き、休憩時間に好きなことをする」といった学習を優先する行動の得点が高かった。「授業内容が理解できないとき」の場面では、GPA 上位群と GPA 下位群、GPA 中位群と比較し、「授業で学んだことが理解できなくても終わったらすぐ家に帰る」といった娯楽や休息を優先する行動よりも「授業が終わったらすぐに教員に理解できなかったことを尋ねる」といった学習を優先する行動の得点が高かった。すべての項目の総得点では、GPA 上位群が GPA 下位群と比

Table3. GPA と学習習慣との関連

(n=115)

項目	カテゴリー	GPA			有意差	
		下位群 (n=38)	中位群 (n=38)	上位群 (n=39)		
1週間の勉強時間	普段	4時間未満	13 (27.1)	20 (41.7)	15 (31.3)	
		4~10時間	23 (50.0)	11 (23.9)	12 (26.1)	**
		10時間以上	2 (9.5)	7 (33.3)	12 (57.1)	
	試験前	4時間未満	6 (35.3)	8 (47.1)	3 (17.6)	
		4~14時間	18 (38.3)	17 (36.2)	12 (25.2)	n.s.
		14時間以上	14 (27.5)	13 (25.5)	24 (47.1)	
予習・復習の有無	予習	行う	14 (30.4)	14 (30.4)	18 (39.1)	n.s.
		行わない	24 (34.8)	24 (34.8)	21 (30.4)	
	復習	行う	29 (33.7)	26 (30.2)	31 (36.0)	n.s.
		行わない	9 (31.0)	12 (41.4)	8 (27.6)	
授業で理解できなかった時の対応	講師に聞く	2 (10.5)	3 (15.8)	14 (73.7)		
	同級生・上級生に聞く	29 (40.8)	25 (35.2)	17 (23.9)	**	
	一人もしくはそのままにする	7 (28.0)	10 (40.0)	8 (32.0)		
自己学習時の音楽聴講の有無	だいたい聞いている	16 (55.2)	7 (24.1)	6 (20.7)		
	時々聞いている	16 (32.0)	19 (38.0)	15 (30.0)	*	
	聴いていない	6 (16.7)	12 (33.3)	18 (50.0)		

値はn(%)

n.s.有意差なし,\*p<.01

Table4. GPA と課題があるときの行動との関連

(n=115)

学習場面	項目内容	GPA			有意差	多量比較
		下位群(1) (n=38)	中位群(2) (n=38)	上位群(3) (n=39)		
授業中について	A: 教員の言っていることを聴かずに好きなことをして後で差違にノートを写させてもらう	4.94 ± 1.56	5.00 ± 1.29	5.13 ± 1.11	*	③>1
	B: 教員の言っていることを注意して聴き、休憩時間に好きなことをする					
授業内容が理解できないとき	A: 授業で学んだことが理解できなくても終わったらすぐに帰る	3.18 ± 1.61	3.03 ± 1.46	4.06 ± 1.24	*	③>1,2
	B: 授業が終わったらすぐに教員に理解できなかったことを尋ねる					
明日までの課題があるとき(R)	A: 先に課題を終わらせてから好きなこと(面白いテレビを観るなど)をする	3.58 ± 1.75	3.89 ± 1.69	4.00 ± 1.54	n.s.	
	B: 好きなことを先にしてから課題に取り組み					
明日までの課題があるとき(R)	A: 課題を終わらせるため友達と遊ばず家で勉強する	4.13 ± 1.69	4.79 ± 1.47	4.64 ± 1.41	n.s.	
	B: 先に友達と遊び帰ってから課題をする					
近々試験があるとき(R)	A: テレビを見る時間を減らし試験の準備のための毎日少しずつ勉強する	3.47 ± 1.77	3.68 ± 1.64	4.28 ± 1.67	n.s.	
	B: テレビを見るのに多くの時間を過ごし試験の直前に勉強する					
明日試験を控えているとき①	A: 試験で悪い成績をとるかもしれないが面白いテレビを見る	4.13 ± 1.89	4.55 ± 1.61	4.69 ± 1.42	n.s.	
	B: 試験で良い成績をとるためテレビはつげず勉強する					
明日試験を控えているとき②	A: 試験で悪い成績をとるかもしれないが友達と遊ぶ	4.66 ± 1.49	4.84 ± 1.40	4.87 ± 1.26	n.s.	
	B: 試験で良い成績をとるため友達と遊ばず勉強する					
明日試験を控えているとき③	A: 試験で悪い成績をとるかもしれないが面白いスポーツの試合を見る	4.47 ± 1.80	5.16 ± 1.29	4.69 ± 1.61	n.s.	
	B: 試験で良い成績をとるためスポーツ観戦はせず家で勉強する					
試験の内容について	A: 自分が好きな科目の勉強にほとんど時間を費やす	4.21 ± 1.46	4.45 ± 1.59	4.41 ± 1.21	n.s.	
	B: 科目の好き嫌いに関わらずまんべんなく全科目を勉強する					
総点		36.18 ± 9.17	39.39 ± 7.79	40.79 ± 7.33	*	③>1

注: (R)は逆転項目

n.s.有意差なし、\*p<0.05

較し、娯楽や休息を優先する行動よりも学習を優先する行動の得点が高かった。一方、「明日までの課題があるとき」「明日試験を控えているとき」「近々試験があるとき」「試験の内容について」の場面の項目においては GPA3 群間に有意差は認められなかった。

3) 友人・家族や教員のサポートとの関連

(1) 友人・家族のサポートの因子分析

Table 5 に友人・家族のサポートについて因子分析の結果を示した。友人・家族からのサポートについては、「周囲から貰える（貰えそうな）知覚的なサポート」を測定する大学生用ソーシャルサポート尺度 23 項目を用いて因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果、2 因子が抽出された。各因子の Cronbach の α 係数は第 1 因子が 0.967、第 2 因子が 0.927 であり内部整合性が高かった。

抽出した因子は片受らの因子尺度をもとに命名した。第 1 因子は、「あなたの努力や心がけをねぎらってくれる」「あなたの努力や心がけを評価してくれる」「あなたの努力や心がけに感謝してくれる」などの 15 項目からなり、評価・情報・道具的サポートと命名した。

Table5. 友人・家族の因子分析（主因子法）

項目	第1因子	第2因子
第1因子: 評価・情報・道具的サポート (α=0.967)		
あなたの努力や心がけをねぎらってくれる	0.902	0.049
あなたの努力や心がけを評価してくれる	0.937	0.008
あなたの努力や心がけに感謝してくれる	0.999	0.076
あなたの成果を評価してくれる	0.984	0.059
あなたの成果をねぎらってくれる	0.948	0.062
あなたに期待してくれる	0.826	0.006
あなたの良いところをほめてくれる	0.820	0.077
他者の前であなたを評価してくれる	0.803	0.024
新しいことを学びたいときに、教えてくれる	0.706	0.008
決心がつかぬときに、アドバイスしてくれる	0.778	0.050
あなたの成果に感謝してくれる	0.766	0.005
あなたが間違ったときに指摘してくれる	0.746	0.044
問題解決方法について、アドバイスしてくれる	0.730	0.019
どうしたら良いかを助言してくれる	0.727	0.032
あなたの気持ちを分かってくれる	0.719	0.030
第2因子: 情緒・所属的サポート (α=0.927)		
あなたの個人的な話を聞いてくれる	0.600	0.938
一緒にいて楽しい時間を過ごしてくれる	0.521	0.825
あなたに必要ない情報を与えてくれる	0.723	0.818
あなたの悩みやグチを聞いてくれる	0.680	0.801
分からないことがあるときに、教えてくれる	0.619	0.785
気分転換につきあってくれたり、遊ばせに連れていってくれる	0.560	0.778
あなたを信頼してくれる	0.719	0.726
一緒に遊びに出かけてくれる	0.439	0.707
因子相関係数		
第1因子	1.000	0.740
第2因子		1.000

Table6. 教員の因子分析 (主因子法)

項目	第1因子	第2因子
<b>第1因子: 評価・情緒的サポート (<math>\alpha = 0.955</math>)</b>		
あなたの努力や心がけに感謝してくれる	.894	-.077
あなたを信頼してくれる	.843	.007
あなたの成果に感謝してくれる	.822	-.180
あなたに期待してくれる	.781	-.037
あなたの悩みやグチを聞いてくれる	.776	-.195
あなたの気持ちも寄り添ってくれる	.767	.039
あなたの成果をわざわざしてくれる	.762	.085
あなたの個人的な話を聞いてくれる	.723	.019
あなたの努力や心がけをねぎらってくれる	.693	.225
あなたの良いところを褒めてくれる	.638	.214
あなたの成果を評価してくれる	.622	.250
決心がつかないときに、アドバイスしてくれる	.608	.271
あなたの努力や心がけを評価してくれる	.543	.841
他者の前であなたを評価してくれる	.540	.253
<b>第2因子: 情報・道具的サポート (<math>\alpha = 0.945</math>)</b>		
どうしたら良いかを助言してくれる	-.084	.938
分からないことがあるときに、教えてくれる	-.090	.907
あなたに必要な情報を与えてくれる	.025	.866
新しいことを学びたいときに、教えてくれる	.025	.857
問題解決方法について、アドバイスしてくれる	-.057	.845
授業に興味を持つように工夫してくれている	.001	.813
あなたが間違ったときに指摘してくれる	.014	.789
	因子間相関	第1因子 第2因子
	第1因子	1.000 0.716
	第2因子	0.716 1.000

第2因子は「あなたの個人的な話を聞いてくれる」「一緒にいて楽しい時間を過ごしてくれる」「あなたに必要な情報を与えてくれる」などの8項目からなり、情緒・所属的サポートと命名した。

(2) 教員のサポートの因子分析

Table 6 に教員のサポートについての因子分析の結果を示した。教員からのサポートについては、「周囲から貰える(貰えそうな)知覚的なサポート」を測定する大学生用ソーシャルサポート尺度を一部改変し21項目を用いて因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った結果、2因子が得られた。各因子のCronbachの $\alpha$ 係数は第1因子が0.955、第2因子が0.945であり内部整合性が高かった。抽出した因子は友人・家族のサポートと同様に片受らの因子尺度をもとに命名した。

第1因子は「あなたの努力や心がけに感謝してくれる」「あなたを信頼してくれる」「あなたの成果に感謝してくれる」などの14項目からなり、評価・情緒的サポートと命名した。第2因子は「どうしたら良いかを助言してくれる」「分からないことがあるときに、教えてくれる」「あなたに必要な情報を与えてくれる」などの7項目からなり、情報・道具的サポートと命名した。

Table7. GPA とサポート因子との関連

項目	因子	GPA			有意差
		下位群 (n=38)	中位群 (n=38)	上位群 (n=39)	
友人・家族のサポート	評価・情報・道具的サポート	4.34 ± 1.56	5.00 ± 1.29	5.13 ± 1.11	n.s.
	情緒・所属的サポート	3.18 ± 1.61	3.03 ± 1.46	4.08 ± 1.24	n.s.
教員のサポート	評価・情緒的サポート	3.58 ± 1.75	3.89 ± 1.69	4.00 ± 1.54	n.s.
	情報・道具的サポート	4.13 ± 1.63	4.79 ± 1.47	4.64 ± 1.41	†

値はn(%) n.s.有意差なし, †p<0.10

Table8. GPA とサポート因子 (2 群間) との関連

項目	因子	GPA			有意差
		下位群 (n=38)	中位群 (n=38)	上位群 (n=39)	
友人・家族のサポート	評価・情報・道具的サポート	あり群 16 (25.4)	22 (34.9)	25 (39.7)	n.s.
		なし群 22 (42.3)	16 (30.8)	14 (28.9)	
	情緒・所属的サポート	あり群 18 (29.0)	22 (35.5)	22 (35.5)	n.s.
		なし群 20 (37.7)	16 (30.2)	17 (32.1)	
教員のサポート	評価・情緒的サポート	あり群 17 (26.6)	21 (32.8)	26 (40.6)	n.s.
		なし群 21 (41.2)	17 (33.3)	13 (25.5)	
	情報・道具的サポート	あり群 16 (26.7)	18 (30.0)	26 (43.3)	†
		なし群 22 (40.0)	20 (36.4)	13 (23.6)	

値はn(%) n.s.有意差なし, †p<0.10

(3) GPA と友人・家族や教員のサポートとの関連

Table 7 に GPA と下位尺度因子との関連を示した。

下位尺度因子と GPA3 群間の差について比較した結果、教員サポートの「情報・道具的サポート」において、GPA3 群間に有意な傾向が認められ、GPA 上位群が GPA 下位群と比較して教員のサポートを受けていると感じている得点が高かった。一方、その他の友人・家族のサポート「評価・情緒的サポート」「情報・道具的サポート」、教員のサポート「評価・情緒的サポート」と GPA3 群間に有意差は認められなかった。

Table 8 に GPA と各下位尺度因子 2 群との関連を示した。GPA と各下位尺度因子 2 群については教員サポートの「情報・道具的サポート」において有意に関連する傾向が認められた。教員サポートの「情報・道具的サポート」があり群の割合が GPA 上位群は 43.3% に対し、GPA 下位群は 26.3% であり、なし群の割合は GPA 上位群が 23.6% に対し GPA 下位群は 40.0% と、上位群が下位群と比較して教員サポートのあり群の割合が高かった。一方、友人家族のサポート「評価・情緒的サポート」「情報・道具的サポート」、教員のサポート「評価・情緒的サポート」と GPA に有意な関連は認められなかった。

#### IV 考察

##### 1. GPA と学習習慣との関連

GPA と学習習慣との関連では普段の 1 週間あたりの学習時間について有意な関連が認められた。1 週間あたり 10 時間以上学習している学生の割合が GPA 上位群は 57.1% に対し、GPA 下位群では 9.5% の割合であった。李<sup>10)</sup> は大学生に授業、授業外の学習、サークル・部活動、アルバイトなどの活動時間が成績に与える影響を調査した結果、成績が優秀な学生は授業と関連する学習・自主学習の時間が長い傾向であったと報告している。また金子<sup>11)</sup> は授業外の学習時間の確保とその効果について調査を行った結果、教員が添削して指導を繰り返し行い、授業外の学習時間が多くなる学生ほど成績は上位に位置する傾向であることを報告しており、本研究の GPA 上位群ほど学習時間が多かった結果を支持している。その一方で李<sup>10)</sup> や金子<sup>11)</sup> とは反対の結果も得られ、普段の 1 週間あたりの学習時間が 4 時間以内の割合において GPA 上位群は 31.1% に対し、GPA 下位群は 27.1% と GPA 上位群が GPA 下位群に比較して学習時間が少ない割合が高い結果も認められ、学習時間の多さだけが GPA に関与するわけではないことが示唆された。

また、「第 52 回学生生活実態調査<sup>12)</sup>」によれば、2 年連続で学習時間が減少しており、特にアルバイトを行っている学生は行っていない学生に比べ、約 20 分も学習時間が少なかった結果が報告されている。山北ら<sup>1)</sup> の報告でも GPA 下位群ほど、アルバイトを行っている割合が高く、さらにアルバイトの時間が長い場合、教員は学生の生活習慣を把握して、学習時間を確保させる指導が必要であることが示唆される。

さらに、GPA と学習との関係では学習の量だけでなく、学習の質、学習意欲も影響するという報告もみられる。李<sup>10)</sup> は成績優秀者と成績不振者をサークル・部活、アルバイトの時間で比較した結果、両者の成績に大差は認められなかったことから、アルバイトが必ずしも成績に悪影響を及ぼすものではなく、成績不良者の中に学習時間が十分にあるにも関わらず、サークル・部活、アルバイトを行っていない学生が存在していることが問題であることを報告している。そのため時間があるにも関わらず、成績が不良である学生の過ごしかたを把握し、目標設定と短期、長期的な計画が遂行できるように周囲が一体となってサポートしていくことが必要である。

また、ベネッセが大学生を対象に高校 3 年時の学習時間を振り返ってもらった調査<sup>4)</sup> では、一般入試者に比べ、推薦・A0 入試者の約半数は、1 日の学習時間が 1 時間未満で受験対策をしなかった比率も高く、受験に対して努力した学生の割合も少なかったとしている。

一方で推薦・A0 入試であっても「あきらめずに努力し続けた」学生は大学への満足度は高かった。そのため教員は高校時代の学習習慣のみならず、入学時の志望動機なども把握することが必要とされる。

また予習・復習の有無と GPA は有意な関連が認められず、GPA 上位群、GPA 下位群ともに予習・復習を行う割合がほぼ同じであった。学習時間と成績に関する報告はあるが、GPA と予習・復習との関連についての報告は殆ど見られない。今回、GPA と有意な関連が認められなかった理由として、第 52 回学生生活実態調査<sup>12)</sup>、私立大学学生生活白書 2015<sup>13)</sup> の調査において、医療系の学生は文系や理系の学生に比べ、1 日の学習時間が長い結果であったと報告している。本研究の調査対象は医療系の学生であり、最終的に国家試験に合格し資格を取得しなければならないため GPA 下位群でも必要最小限の復習・予習を行っていることが推察される。しかし対象校は講義の課題提出も多いため GPA 下位群は予習・復習よりも課題に時間を費やしていることが推察される。金子<sup>11)</sup> は学生に授業毎に出席レポート課題を学生に課すため、課題作成に要する授業外での学習時間が多くなることを報告している。時間が多くなることで学習意欲が促進される効果が認められる一方で出席レポートを作成することに対する負担感に耐えられない学生もいるため、学習意欲が低下しないように対応策を行う必要性を報告している。そのため教員間で各科目における課題の量を把握し、GPA 下位群に教科のレポート作成だけに偏らないように予習・復習の計画を立て達成感を持てるように指導する必要がある。しかし、本研究では GPA 下位群は、授業で理解できなかつた時の対応において講師に聞く割合が低く、1 人で理解できなかつたところを自分で解決する。もしくは、そのままにしておく割合も高かつたため授業内容の理解度を学生に確認しながら進めコミュニケーションをとっていく必要がある。同様に GPA 上位群は 1 人で理解できなかつたところを自分で解決する。もしくは、そのままにしておく割合は高かつたが、講師に聞かない場合でも自分で解決できるという結果が認められた。西丸<sup>14)</sup> は学業成績・能力向上感を調査した結果、「教員に質問・ディスカッションに参加」をよくする学生ほど高い GPA であるという報告や広沢<sup>15)</sup> は、アクティブラーニングの一種である Learning in Teaching の学習効果を研究した結果、累積 GPA が高い群、授業外の学習時間が長い群ともに、Learning in Teaching を活用することによって、普段の講義と比べて論理的理解による想起力の向上や授業外の学習時間の増加の因子として、学習効果の違いを認知していると報告している。

また今回、GPA 上位群は普段における 1 週間あたり

の学習時間が4時間以内の割合が高いといった結果も得られた。これは李<sup>10)</sup>は学習量だけで成績が決まるわけではないと報告している。山北ら<sup>1)</sup>の学業成績と講義中の居眠りの関連について調査した結果よりGPA上位群ほど講義中に居眠りをしないで集中している割合が高かったと報告している。さらに理解ができないと講師に聞くため、理論的に考える思考能力が高いことが推察され、GPA上位群は自分で問題を解決できる能力が身に付いており、講義内、もしくは学内での空き時間を有効利用して、少ない学習時間で学習内容を理解していることが推察される。

また自己学習時に音楽を聴いている者が、GPA下位群に多いことが認められた。二重課題における注意の偏りや課題遂行に及ぼす影響は報告されており、櫻井ら<sup>16)</sup>は、携帯電話の使用における注意分配と会話が視覚的注意分配に与える影響を研究した結果、シングル課題よりも二重課題の方がパフォーマンスは低下し、さらに〇×で考えるような聴覚刺激を与えると視覚的パフォーマンスが低下したと報告している。また宮原<sup>17)</sup>は、テキストの朗読再生課題を用いて聴覚刺激による妨害効果を研究した結果、静穏条件よりも言語音条件とオフィスノイズ条件で、朗読の再生エラー率が有意に高かったと報告している。本研究でも音楽を聴きながら勉強することにより、聴覚刺激が、視覚刺激からの注意を分割させ、学習記憶としての情報処理が低下している可能性が推察される。GPA下位群は、音楽を聴きながら勉強している学生が多いため、成績不良者の中で音楽を聴きながら学習している学生に注意喚起していく必要性が示唆される。

## 2. GPAと授業中や試験前、課題が提出されている時の行動との関連

授業中や授業で理解できないときの学習場面において、GPA上位群はGPA下位群に比べ娯楽や休息よりも学業を優先する行動の得点が有意に高かった。中西ら<sup>8)</sup>は、学業を優先する行動と努力調整、メタ認知能力、計画行動、学習時間と正の相関が認められたとしており、学習習慣を定着させるためには、学業を優先できる能力が必要で、娯楽等の誘惑への欲求を適切に制御して、学習時間を確保することが重要であり、そのためには自己認知能力が必要であることを報告している。本研究でも同様にGPA上位群ほど、学業を優先し、後回しにしないことが認められ、GPA上位群は計画的に行動ができるメタ認知能力があることが推察される。さらに中西ら<sup>8)</sup>は持続性の欠如は学業の延引と負の相関が認められ、学習を持続させるためには興味も必要だと報告しており、教員は学業場面において興味を持たせる指導が必要であることを示唆している。

また学業課題を延びさせる、その他の要因として、堀本ら<sup>18)</sup>は学生を進級群と留年群の2群に分け、性格と情動に着目し、認知領域に影響を与える研究をおこなった結果、留年群は課題認識が乏しいわけではなく、状況把握や問題解決能力に関する性格的要因が関与し、計画が立てられないことを報告しているため、今後は性格も含めた検討が必要と考える。

## 3. GPAと友人・家族や教員のサポートとの関連

友人・家族や教員のサポート下位尺度因子におけるGPA3群間の差について比較検討した結果、教員サポートの下位尺度因子である「情報・道具的サポート」において、GPA上位群がGPA下位群より教員のサポートがあると感じている傾向が認められた。さらに教員のサポートがあると感じている群とないと感じている群でGPAとの関連について検討したところ、教員サポートの「情報・道具的サポート」において、GPA上位群がGPA下位群に比べ、教員のサポートがあると感じている割合が高い傾向が認められた。その他の友人・家族のサポートの下位尺度因子、教員のサポートの「評価・情緒的サポート」ではGPA3群間に有意差やGPAとの関連は認められなかった。ベネッセ教育総合研究所が行った「第3回大学生の学習・生活実態調査」<sup>19)</sup>によれば、教員との交流において「気軽に相談できる」「普段から気にかけてくれる」といった学生は3割にとどまり、「保護者のアドバイスや意見に従うことが多い」「困ったことがあると、保護者が助けてくれる」と保護者の役割が大きくなっている。また友人関係では、「授業などの情報交換をする友人がいない」と回答した学生が12.9%存在すると報告されており、教員、家族、友人などの周囲のサポートが必要であることが伺える。本研究では、GPA上位群程、教員の「情報・道具的サポート」を感じている割合が高い傾向が認められた。この「情報・道具的サポート」は、問題を理解している人からアドバイスや支持を与えられて、処理する際の助けとなる「情動的サポート」と必要なサービスの提供や、金銭、物資的援助をしてくれる「道具的サポート」で構成されており、GPA上位群は本研究の授業で解らなかつたことを聞く割合が高かったことから、自分にとって講師はアドバイスや必要な情報を与えてくれる1つの手段だと認識し、講師の位置づけをしていることが推察される。また榎本らは<sup>20)</sup>大学新入生の大学適応感に及ぼす生活要因の影響を研究した結果、人間関係を形成していく過程と学業や大学での活動に対する学生の態度に「友人との関係」「教員との関係」「学業への取り組み」の要因が正の影響を及ぼすことを明らかにしている。そのため教員からのサポートがないと感じているGPA下位群に対して、教



員から積極的に声をかけて、学業への取り組みを指導していく必要性が示唆される。また片受ら<sup>21)</sup>は、ソーシャルサポートと精神的健康、サポートを受ける際の適切な相手への援助要請との関連について研究し、「情報・道具的サポート」は抑うつを軽減させることと関連があり、サポートを多く受け取るためには、援助を自ら積極的に求めていくスキルが必要であることを報告している。本研究より、GPA 下位群は授業で理解できないことを、そのままにしておくことが認められるため、教員はGPA 下位群に積極的に相談や質問できるような雰囲気作りが重要であることが示唆される。

## V 結論

本研究は、成績不良者における教育の質の向上を目的とし、A 専門学校の理学療法学科、及び看護学科の学生にアンケート調査を実施した。学習行動・態度やソーシャルサポートが学業成績に与える影響を検討した。

1. GPA 上位群では勉強時間が長く、理解できないことは講師に聞く学生の割合が多かった。また、一人で理解できない事を解決する、もしくはそのままにしておく割合も高く、講師に聞かなくても自己で学習できることが認められた。
2. GPA 下位群は、授業中や試験前、課題が提出されている時の行動において、学習を後回しにする行動を選択しており、学習場面において優先順位を決定できないことが認められた。
3. ソーシャルサポートとの関連について、GPA 上位群は、教員を自分にとって判らないことや様々な情報を与えてくれる1つの手段だと理解し、位置づけをしている。また、教員からサポートを受けることで、自己効力感や優先順位を決めて行動ができるようになることも認められた。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、お忙しい中、ご協力頂きましたA 専門学校の理学療法学科・看護学科の先生方、学生の皆様に感謝申し上げます。

## 引用文献・参考文献

- 1) 山北和幸, 他: 生活習慣と身体症状、学業成績との関連について. 瀬木学園紀要 第16号, 54-62, 2020
- 2) 長根光男, 他: 睡眠パターンと学業成績や心身状態は関連するかー夜間睡眠の質と量 日中の眠気と短時間睡眠の活用ー. 千葉大学教育学部研究紀要 第63巻, 375-379, 2015
- 3) Benesse 教育研究開発センター「高大接続に関する調査」  
<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3984> (参照 2020-03-05)

- 4) Benesse 教育研究開発センター「大学生が振り返る大学受験調査」  
<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3163> (参照 2020-03-05)
- 5) 全国大学生生活協同組合「第52回学生生活実態調査の概要報告」  
<http://www.univcoop.or.jp/press/life/report52.html> (参照 2017-08-02)
- 6) 一般社団法人日本私立大学連盟「私立大学学生生活白書2015」  
[http://www.shidairen.or.jp/blog/info\\_c/support\\_c/2015/09/29/18118](http://www.shidairen.or.jp/blog/info_c/support_c/2015/09/29/18118) (参照 2017-07-15)
- 7) 外山美樹: 社会的比較が学業成績に影響を及ぼす因果プロセスの検討ー感情と行動を媒介にしてー. パーソナリティ研究 第17巻(2), 168-181, 2009
- 8) 中西満悠, 他: 大学生を対象とした日本語版学業的満足遅延尺度の開発. パーソナリティ研究 第23巻(3), 197-200, 2015
- 9) 片受靖, 他: 大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討ー評価的サポートを含む多因子構造の観点からー. 立正大学心理学研究年報 第5巻, 37-46, 2014
- 10) 李敏: 学習時間と学習成果との関係ー信州大学「学習時間調査2015年」の結果に基づいてー. 信州大学総合人間化学研究 第5巻, 59-72, 2017
- 11) 金子能呼: 授業外学習時間の確保とその効果に関する一考察. 松本大学研究紀要 第15号, 115-122, 2017
- 12) 全国大学生生活協同連合会「第52回学生生活実態調査」  
<http://chosa.itmedia.co.jp/categories/society/92516> (参照 2017-06-10)
- 13) 日本私立大学連盟「私立大学学生生活白書2015」  
[http://www.shidairen.or.jp/blog/info\\_c/support\\_c/2015/09/29/18118](http://www.shidairen.or.jp/blog/info_c/support_c/2015/09/29/18118) (参照 2017-07-15)
- 14) 西丸良一: 大学生の学業成績・能力向上感と入試選抜方法の関連. 評論・社会科学 第111号, 141-155, 2014
- 15) 広沢俊宗: LITEの学習効果に関する研究(II)ー対人的積極性等の個人差変数との関係についてー. 教育総合研究叢書 第6巻, 35-49, 2013
- 16) 櫻井美由紀, 他: 視覚・聴覚の二重課題における注意の偏りについての研究(2). 日本応用心理学大会発表論文集 第70回, 2006
- 17) 宮原道子, 他: 聴覚刺激が認知課題遂行に及ぼす影響. 日本応用心理学大会発表論文集
- 18) 堀本ゆかり, 他: 認知領域に影響を与える性格的特性分析. 理学療法科学 第26巻4号, 525-530, 2011
- 19) Benesse 教育研究開発センター「第3回大学生の学習・生活実態調査」

<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5169> (参照 2020-03-05)

- 20) 榎本光邦：医療系大学における新入生の大学適応感に及ぼす大学生活要因の影響．群馬パース大学紀要 第 21 巻，5-15，2016
- 21) 片受靖：新大学生用ソーシャルサポート尺度と精神的健康、援助的要請スキルの関連についての研究．立正大学心理学研究年報 第 14 号，65-70，2016

#### 備考

本研究に関する特記すべき COI はない